

## 原種生産合理化に関する調査—その2

齊藤清男・猪山純一郎  
(大分県農業技術センター)

SAITO, S. and IYAMA, J.  
Some Investigations for Rationalization on Original Seed Production  
of Main Crops. (II)

原種生産の合理化をはかるための基礎資料を得る目的で労働実態調査を行なっているが、今回は、昭和44年を中心にその問題点をさぐってみた。

### 実働時間の時期別変化・稲作作業別労働時間

稲麦の原種圃約390aに要する労働は、昭和44年1月から12月の1ヶ年間に延人数1053人、延実働時間4042時間であった。また、昭和44年度稲作は、栽培面積134a、総籾生産量4560kgで、10a当たり延人数45人、総労働時間156.6時間であった。

第1表 稲作作業別労働時間(10a当たり)

作業名	昭和43年		昭和44年		現 行	
	時間	割合	時間	割合	時間	割合
圃場整備	36.7	17.4%	—	—	—	—
種子子措	0.3	0.1	1.0	0.6	0.5	0.4
苗代一切	22.0	10.4	5.3	3.4	6.2	4.5
耕起・整地・元肥	20.1	9.5	7.1	4.5	15.7	11.5
田植	32.3	15.3	33.9*	21.6	26.5	19.3
除草	12.9	6.1	31.4	20.1	12.5	9.1
水管理	11.0	5.2	12.9	8.2	16.4	12.0
防除	3.1	1.5	7.5	4.8	6.2	4.5
刈り取り	18.6	8.8	14.8	9.5	15.7	11.5
稲干し・脱穀	24.6	11.7	22.1	14.1	26.6	19.4
籾穂抜き	6.1	2.9	5.1	3.3	—	—
選別調製	12.1	5.7	9.3	5.9	—	—
特性調査	3.6	1.7	1.0	0.6	—	—
出荷および準備	2.1	1.0	1.5	1.0	—	—
その他	5.3	2.7	3.7	2.4	10.8	7.8
計	210.8	100.0	156.6	100.0	137.1	100.0

注) 1. 現行の作業時間は九州平均(昭和42年産米生産費)  
2. \* 直播の補植も含む

実働時間の時期別変化は第1図に示す通りで、4月中旬から5月中旬の期間は、昭和44年は43年に比べ大きく減少した。これは第1表でも示す通り、圃場整備作業がなくなったためである。

5月中旬から7月上旬(麦収穫から田植)の期間は、昭和44年は43年に比べそのピークが全体的になだらかになった。とくに6月下旬の極端なピークがくずれた。この理由として(1)麦収穫におけるバインダーの大幅な使用(対43年比率152%) (2)直播(乾直)の大幅な採用(対43年比率170%)があげられる。

その反面、7月上旬、8月上旬から9月上旬の期間は、第1表の田植、除草の項でも示す通り、44年が、直播の補植や除草に多くの時間を要したため、実働時間が増加した。

ここで、慣行田植時の人夫不足対策として、直播を採用したことに対して、労働ピークがくずれたという利点はあったが、二三の問題点が生じた。

(1)除草が困難である。(2)籾穂抜きがしにくい。(3)翌年も前年の種子が発芽する危険性がある。以上の点から、原種生産には直播の採用は好ましくない。

要約 (1)麦収穫から田植時の労働ピークは、機械化等により全体的になだらかになった。とくに6月下旬の極端なピークがくずれた。

(2)原種生産には直播は不向であろう。

第1図 実働時間の時期別変化

